

うたらば

短歌×写真のフリーペーパー「うたらば」
2026.3 vol.41

TAKE FREE

戦
い

今回のテーマ



短歌とは

5・7・5・7・7の5句31音のリズムで詠まれる短い抒情詩。
俳句で使われる「季語」は不要。

古くは奈良時代から身分の貴賤を問わず親しまれ、
現代でも日々の想いを綴る詩形として幅広い層に詠まれています。

一方で、その長い歴史を国語の授業で習うこともあり、
短歌とは難しいものである、と思っている人もしばしば。

このフリーペーパーは「短歌をよく知らない人」に
現代短歌の面白さに触れていただくために作ったもの。
軽い気持ちで、ぜひページをめくってみてください。

作品テーマ

戦い



小さくても
大きくても
戦うことは
前進だよ

逃げたら負けて
迷信だから
逃げたその先で
勝てはいいよね

「ゲームにさえ逃げるコマンドがあるんだし」

保健室で教師は言った

戦ぐとは書くけど風は

いつ誰と戦うのかを風に訊いてる

受け入れるのか
あらがうのか
風の見てきた
戦場がある

取るに足らない
障害物も
ないならないに
越したことない

伸びてくる爪をぱちんとやっつけて

わたしは今日も生きております

時間が経てば
その怒りさえ
血肉となるから
しばし待とうか

戦いの火蓋を鍋にかぶせたら

一時間ほど煮込んでいきます

短歌：水田みさと

いちばんひどい
私のままで
あとどれくらい
生きるのだろう



綿が飛び出てるくたびれたテディベアだよわたし

縫ってから去れよ

勝てない人に
勝ちたくなって
完敗をして
幸せだった

絶交をした後なのにきみはただ

パピコをくれてわたしの負けだ

佳作集



戦い ①

戦いは始まっている爪切りを隠して猫の間合いに入る／南万里

倒れつつ回想シーンに入りゆく敵の並外れた記憶力／石川真琴

思いやり合戦が始まったから夫婦げんかはそろそろ峠／涸れ井戸

包丁は確かな殺意で不確かに「刃物のようなもの」と呼ばれる／田村陽

ためらわず当たりのくじを引き抜いて笑うしたたかさに救われる／十条坂

「あたたかい」その八割は「たたかい」だ しずかに熱をもつ君の生／吉田冬扇

七センチヒールで始発を待つ君はわたしの知らない戦場へ行く／栗平紗江

わたくしに「いちばん好き」と言う人の二番目以降を思う月曜／冬美

酵母さん、乳酸菌さん、こんにちは。納豆菌です。侵略しますね。／おいとま

今はただ青い芝生が休むのみ二十二人の戦いのあと／畑 依裕

動くなよ！両手を上げろ。(レジへ行く) 今日こそ私に払わせてくれ／苔うたう

戦いの証が欲しい赤本の表紙に作る小さな折り目／雲原太郎

悲しみをただの景色にするための訓練として海を見に行く／箭田儀一

守りたいものが増えてく守るとは戦うことだ それも静かに／さくらいたかよし

戦法のひとつのように遠回りしながら進むきみは晴れやか／宮緒かよ

手をたたこう幸せならば ばん 銃声 誰かの胸の張り裂ける音／渡邊泰明

玉葱を切りつつ母は泣いていた冷戦中の手作りカレー／上溪三竿

負けたくも勝ちたくもないじゃんけんを続けて夜を引き伸ばそうよ／青木菓子

苛立ちが爆ぜてゆくの止められず鯖を焦がした夕べの喧嘩／星野珠青

うつくしい秩序はときにおそろしい一糸乱れぬ軍事パレード／関根裕治



がんばれはつまりファイトで

戦えとわたし気軽に言ってしまった

投げた言葉は
戻らないから
あなたの幸運を
ただ祈るだけ

短歌：榎枯井戸

人知れず「降る」と「降ろす」の戦いを

今日も続ける白銀の村


あるがままでは
生きられなくて
戦うしかない
冬だったこと

短歌：持田圭

勝ちとか負けとか
気にしなくていい
翼がわたしに
あればいいのに

今ここで生きてることが戦いの

証明ですと青空を撮る



手のひらを
手のひらで包む
勝負ではない
祈りのかたち

おさなごのパーは「ぱあ」っていうサイズ

私のグーを包めはしない

負けてこそ
出会える幸せを
はじめて知った
ある春のこと

今日もまたパパは小さなヒーローに

倒されるため家路を急ぐ



戦い ②



カーディガンかなぐり捨てて母は行く風船バレーの決勝戦へ／澤子
車海老まだ生きていてキッチンで戦支度が急に始まる／ふうらい牡丹
あと一歩およばなかったスパイクに残った土を落とせずにいる／藤原ほとり
離乳食こくりこくりと船を漕ぎ戦っている小さき戦士／はるようこ
日曜の朝の平和を確かめるために見ている戦隊ヒーロー／大池アザミ
勢いのよいバタフライでやつてくる睡魔 5限の古文演習／ともえ夕夏
決闘を申し込みますとりあえず今日は前夜祭をしましょう／渡愛奈
巢立ちゆく子らの部屋から聞こえる炊飯器いる、いらぬ論争／葉月ままこ
何事も勝った負けたの世の中であなたと引き分けていたのです／梅田エルマー

一年を生き抜くためにみなで食む戦闘力の高そうな蟹／古澤茅世加
戦争と戦争の間の幻の平和それでも僕らここにいる／柳水月

八つ当たりされた時だけ脳内でツインテールを部長につける／くらたか湖春
不戦敗すつからかんの肉コーナー魚コーナー惣菜コーナー／鴨岡佑

戦ってるのか愛しあっているのかわからない早春の夜の猫をみていた／西鎮
関ヶ原 天下分け目の戦場はどん兵衛の味の分け目となった／中村 一郎

戦いのシーンが何度もある映画中で何度も死ぬエクストラ／佐々木敦史
チュールでも猫じゃらしでも懐かないかなり手ごわい彼の飼う猫／三木絵糸
「○○の戦」とふたりの歴史上刻まれそうな今宵の不穏／風花 暁

大柄な子に勝利して得意げな長女の着けた可愛いまわし／衣末（みみ）
経験値稼ぎのために自分より若干弱い相手に挑む／かやばなしこ



いつだって調整のきく存在で名は「派遣さん」としか呼ばれず

(natsuko)

派遣社員の方が「派遣さん」と呼ばれる。まるで「派遣さん」という着ぐるみを着ているかのような。呼んでいるほうは無意識でも呼ばれた側は気になるでしょう。「正規雇用」に対して「非正規雇用」と呼ばれる雇用形態の名称にも個人的には違和感があったので主体の心情を思っって心がキュッととなった作品でした。

「虹だよ」と誰かの声に子らの輪はわっと崩れて窓辺へ移る

(ホルケ・ポリンヌ)

短歌とはどんなものか聞かれたら自分が良いと思った瞬間や感情を定型で書き留めるもの、と答えます。この作品はまさにその典型。教室の窓から虹を見つけた子が叫ぶ。それをきっかけに子供たちが窓辺に移動する。ただそれだけですが、作者はその瞬間に何かを感じ、短歌となり、読者に届き、読者もまたその瞬間をいいなと思う。見落としてしまいそうな瞬間を切り取るからこそ短歌の醍醐味だと感じた作品です。

犯人を口調で見抜くベテランの刑事のウンを見抜く奥さん

(うおざび)

サスペンスドラマをたくさんみている人は配役や演技で意外と真犯人を見抜けると言います。ですが今回はさらに一枚上手の奥さん。先の先まで読んで「この人が犯人ね」と家族に伝えている景が目に浮かびます。お話を純粹に楽しめているのかは疑問ですがこれはこれでドラマの楽しみ方のひとつかもしれません。

祝日を決める会議は楽しそうハッピーターンとか持ち寄って

(たろりずむ)

あまり世の中に知られていない「祝日を決める会議」の存在にフォーカスしたところが面白いです。実のところは国会でお堅い代議士の先生方が議論しているはずですが、「祝日を決める会議」と呼べばとても楽しげなものに聞こえてくる。「楽しそう」の具体として提示される下の句の「ハッピーターン」も絶妙な道具立てで、会議の軽さを強調されています。

あの町で暮らしたひとつの回答のように信金の口座が残る

(君村類)

私にも幼少期を過ごした町の信金や地銀の口座が残っているのでもとても共感できました。多くの人がその手の休眠口座をひとつやふたつ持っていることでしょう。そこに目を付け短歌の題材としたところに作者のセンスが光ります。忘れられた頃に届く信金からのお知らせが現在と当時を繋ぎ続けているのでしょうか。



読む。

「月刊うたらば」より
文・田中ましろ

「きりーつれー」日直だけに許されたみんを操る詠唱魔法

(はぎさわやか)

日直の号令を「詠唱魔法」と捉えた下の句が素敵でした。「起立、礼」ではなく「きりーつれー」。クラスメイトが自分の言ったとおりに動く状況に酔いしれている主体が目に見えます。いろいろな面倒な日直の日にせめて授業の最初だけみんなを操る快感を味わいたい。「詠唱魔法」にやや中二病感が出ているのも個人的にはすごく好きです(笑)



抱え上げられてつかまるところだけ人間らしい吊り輪の選手

(音平まど)

体操の試合はオリンピックの中継からいではなかなか映像で見られないですが、競技中にどれだけすごい技を披露する選手でも冒頭だけは人の手を借りてまず吊り輪を掴まないと演技を始められないところに大きな気付きがあります。言われてみたら確かに面白い、という景を掬いといった着眼点が見事な作品でした。

チケットを射止めて強いわたしたち次の春まで生き延びるのだ

(玖嶋さくら)

ライブかスポーツイベントの前売りで見事に当選したというシーンでしょうか。当選が「射止めて」と単なる運ではなく自らの力で勝ち取ったような表現であるところに強い喜びを感じます。下の句の「生き延びるのだ」には主体の日常の過酷さが滲み出ており、チケットを射止めたことで春までの命の糸が繋がったようなそんな主体の姿を思い描きました。



夕立が上がった途端光り出す大きな予感にまみれて街は

(枚角うら)

一読した時に「天気の子」のワンシーンかと思ったくらいその景に惹きつけられた一首。夕立が上がってから日が差すまでを「途端」としたことでタイムラプス映像のような印象が生まれ、「大きな予感」との相乗効果を生んでいます。ダイナミックな動きと具体的な結論をあえて出さない締め方が予告編のような読後感を読者に与えてくれます。

おさな子が「よいしょ」と言って腰かけるたぶん家族のだれかを真似て

(関根裕治)

言語の習得はまず話すところから始まります。誰に教わるでもなく、そのおさな子は家族をしっかりと観察して、腰かけるときには「よいしょ」ということを学んだということ。家族もまたそれを聞いて誰から学んでしまったかの議論が始まることでしょう。日常のちよつとした風景ですが、その前後に起きうるストーリーを感じる、奥行きのある一首です。

短歌募集中

「月刊うたらば」では、いつでも作品を募集しています。毎月変わる投稿テーマにて、短歌作品をぜひお寄せください。今月のテーマや募集要項などの詳細は「うたらば」公式サイトをチェック！



戦争はとおくのものと思いつつ弾く春の歌

すこしさびしい

しずかに近づく
不穏があって
春は楽しい
ばかりじゃないね



編集後記

最後までご覧いただきありがとうございます！
前号テーマが「休日」で今号が「戦い」。みごとに
反対のテーマが続く形となりましたが、「戦い」も
皆さんがさまざまな戦いを抱えて生きているんだ
など思える作品がたくさん集まりました！

戦争などの重めの戦いからじゃんけんの勝ち負け
まで、そのすべてが「戦い」で、作者の日頃の
心の持ち様が作品に直結するテーマなのかもしれ
ないな、と興味深く読ませていただきました。次
号はまた日常テーマの「コンビニ」。いろんなコン
ビニでのストーリーに出会えるを楽しみにしてい
ます！今後とも「うたらば」へのご投稿とご協力、
何卒よろしく願っています！

企画・写真・詩・デザイン
田中ましろ

うたらば vol.41【戦い】 2026年3月22日発行

○企画・撮影・編集 / 田中ましろ ✉ @tnkmsr_photo

○モデル / あいだあい ✉ @ai_da_ai @ @aidai0330

○短歌 / 投稿者の皆様

✉ @utalover 🌐 <https://www.utalover.com/>

短歌は
もっと
自由になれる

